

令和6年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

1 研究の内容

授業力向上（○）・道徳教育（ ）・キャリア教育（ ）・特別活動（ ）
カリキュラム・マネジメント（ ）・その他（ ）（内容： ）

2 学校の概要

（単位：人）

プロジェクト校	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任名
宇土市立宇土東小学校	267名	21	丹生 伸二	戸澤 義博

3 研究主題

「“できた” “分かった” と子供が輝く算数科授業」

～子供も教師も “わくわくする” 授業づくりを目指して～

4 研究主題設定の理由

開校以来、算数科の指導方法について研究を続けている。対話活動の充実に重点に置き授業改善を行う中で自らの考えを持ち、論理的に表現できる児童が増えている。一方で、自分の考えを持つことができず、学習への意欲が消極的な児童がいるなど、二極化が進んでいることが課題である。

算数の学習に対する意識調査では、約7割の児童が「算数の授業は楽しい」「算数の授業では学習したことがわかるようになっている」と回答している。それに対して「学び合いの時に、友達の考えを聞いて、そこから自分で考えたことや思ったことを伝えている」と回答する児童は約6割と少ない。意欲的に取り組む児童が増え少しずつ学力の向上が見られている反面、自分の考えを周りに伝えようとする意識を持たせることに課題があり、学習内容の定着が不十分な児童も見られる。

これらの結果を踏まえ、子供の「わくわく」が連続し、「分かった」「できた」「もっとやってみよう」が生まれる授業づくりを行うことで学習意欲を高め、思考力・判断力・表現力を育てる取り組みを展開することにした。

5 研究の具体的な取組内容の実際

(1) 子供の「わくわく」が連続し、「学びを生かそう」とする姿が生まれる単元デザインの工夫

単元計画を考える際に単元の中心的な学習課題（単元を通じた学習課題）を設定する。その際に、児童が興味関心を持って取り組めること、他の教科とつながる問題を考えること、日常生活に戻して捉えること、という3つの視点をもとに考える。

(2) 子供の「なぜ」「おそらく」（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫

児童のわくわく感が高まり、問題に取り組む意欲や日常生活につなげようとする意識を持たせることができるような単元のゴール（中心的課題）を設定する。

(3) 子供の「やってみよう」「なるほど」「きっと」（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫

学年の発達段階に応じた話法「つなぎ合う東っ子」をつくり、対話活動の際に活用する。特にグループで話し合う際に、相手の相違点に目をつけることでその考えのよさ

を確認できるようにする。学び合いを深める場面では「〇〇さんの考えがわかる？」「もう一度〇〇さんの考えを言ってくれる？」など、友達の影響を受けて答える発問シートをつくり、職員で共通実践していく。

(4) 子供の「分かった」「できた」「もっとやってみよう」(実感や更なる意欲等) が生まれる終末の工夫

振り返りの目的を「学んだことを確認する」「これからの学びを見直す」「次の生活に問いにつなげる」とし、具体的な視点を「わかったこと・わからなかったこと」「友だちの考えを聞いて思ったこと」「次に考えてみたいこと・生活に生かしたいこと」の3つを大きな柱とし、学年に応じた視点を設定する。振り返りを共有する方法として、タブレットを活用することで他者の振り返りをいつでも参照できるようにする。その際、教師が評価の視点を示すことで、児童にもその視点が明確になるようにし、次の学習への意欲付けにつなげる。

6 目指す成果【検証方法】

- 算数の学習に対する意識調査で「算数が楽しい」「算数の授業で学習したことが分かるようになってきている」と答える児童が増える。

【実態調査アンケート】

- 算数の学習に対する意識調査「算数の時間に自分の考えを伝えている」と答える児童が増える。

【実態調査アンケート】

- 学力調査において標準スコア50未満の児童数を減少させる。

【熊本県学力・学習状況調査】

7 研究実施の実際

時 期 (月)	実施内容
令和6年 5月	「熊本の学び」研究指定を受けての算数科提案授業
令和6年 5月	提案授業を受けての専門部会
令和6年 7月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和6年 9月	算数科 高学年部 大研 授業研究会
令和6年 9月	算数科 高学年部 大研を受けての専門部会
令和6年 10月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和6年 11月	算数科 低学年部 大研 授業研究会
令和6年 11月	算数科 低学年部 大研を受けての専門部会
令和6年 12月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和6年 12月	算数科 研究発表事前授業 授業研究会
令和7年 1月	「熊本の学び」研究発表
令和7年 2月	「熊本の学び」研究発表反省

8 市町村教育委員会の取組の実際

- 円滑かつ効果的な研究に向けた支援を実施した。具体的には、指導主事による研究発表前の小研及び研究発表当日の低学年部授業研究会での指導・助言を行うとともに、学校教育指導員による年間を通じた授業参観等での指導・助言を進めた。
- 研究内容の市内小中学校への発信及び共有を図るため、研究発表当日に市内全ての小

中学校から数名ずつ教職員に参加してもらい、公開授業や授業研究会を通じて研究内容や自校への活用等を協議する場を設けた。また、研究会後は、市内の校長会議や学力充実推進会議の中で、研究内容の紹介や各校での活用等の依頼を行った。

9 研究の成果【検証方法】

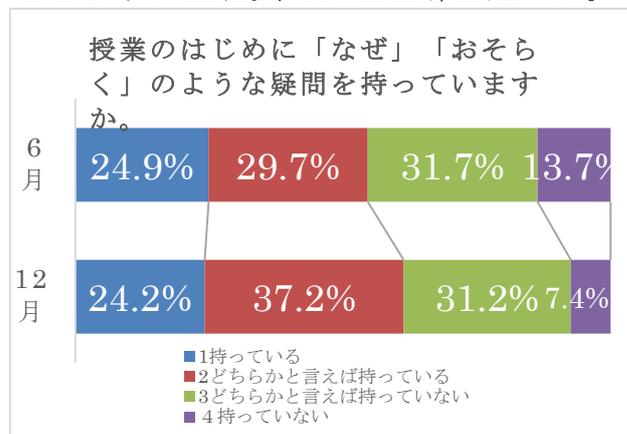
「“できた” “分かった” と子供が輝く算数科授業」目指し、児童自らが問いをもち、主体的に考えをつなぐ対話活動を取り入れた授業を共通実践事項として取り組んだ。本校では、本年度“より多くの子供たちに活躍の場を”というテーマをもとに、6年生を中心に児童が主体となって活動する場を多く設けた。算数科の授業づくりにおいて6年生が他の学年の研究授業を参観し、授業研究会にも参加した。また、教師への評価を子供が行うことで子供の声を聞く場を設け、授業改善に役立てた。

(1) “わくわく” が連続する単元デザインの工夫

単元計画を考える際に単元の中心的な学習課題（単元のゴール）を設定した。その際に、児童が興味関心を持って取り組めること、他の教科と関連づける課題を考えること、日常生活に生かすこと、という3つの視点をもとに考えていった。このことにより、児童のわくわく感が高まり、問題に取り組む意欲や日常生活に生かそうとする意識を持たせることができると考えた。2年生の「100より大きい数を調べよう」では「宇土市にある7つの小学校の子供の数を比べよう」という課題を設定した。また、4年生の「グラフや表を使って考えよう」では、楽しみにしている見学旅行の場面を想定し、「山都町の気温の変化を知りたい。」という問いから、宇土市との気温の違いに気づき、最適な服装を考えることにつなげる事ができた。

(2) “なぜ” が生まれる導入の工夫

導入の工夫では、教師の仕掛けによって感覚や既習内容とのズレをつくり出し、子供が問いをもつことにつなげた。授業の導入部で児童が問いをもつために教師のしかけを用意しておいた。1年生「ながさをくらべよう」では、そのままでは長さを比べることができない具体物を用意し、「あれ、おかしいぞ」「○の何個分？」などのような問いをもつことができた。また、教師のしかけにより問いをもった児童が、自力解決の際に解き始められるように見通しをもたせることが大切だと考えた。そこで、見通しをもたせた具体的なめあてを記述することで、全員が同じスタートを切ることができるように全職員で共通理解を図った。

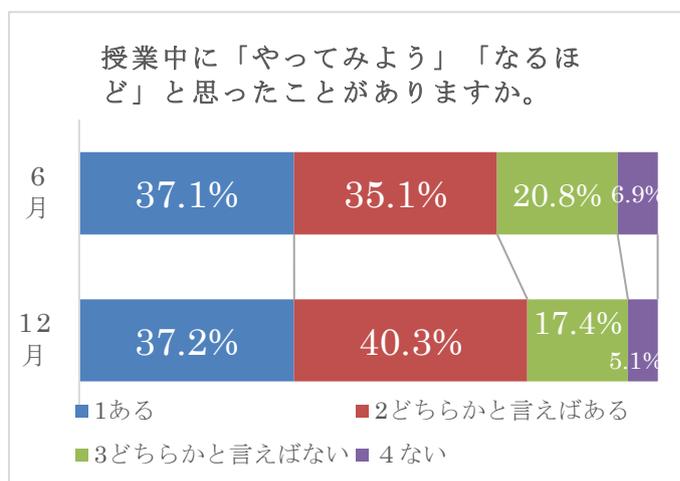


授業の導入において、教師のしかけにより既習とのズレを生み、問いを持つことにつなげた。また、めあてを児童と共に考え、より具体的な見通しを持った表記にすることにより、一人で自力解決を始められる児童が増えた。これらのことにより、自ら問いを持ち、探求しようとする児童が増えたと考察される。

(3) “やってみよう” が生まれる展開の工夫

展開の工夫では、自力解決の見通しが立った後、解決方法を自ら選び取るようにし

た。必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察し、実際に解決したり、結果を確かめたりする活動を通して、自ら算数を学び続ける楽しさを実感できるようにした。4年生「グラフや表を使って考えよう」では、変化量の大きい折れ線グラフのかき方をコース別に分類し、自ら選択してスタートできるようにした。また、同じコースで集まり、周りの考えとの相違点を比べることで友人のよさに目を向けられるようにした。



自力解決をスタートする際に選択できるコースを用意したことで、自ら学習内容を選び取る経験を多く積むことができた。また、算数日記で「話し合いの時間がもっとほしい」という声が多かったことを踏まえて授業を実践していく中で、「○○さんの考えの方がよりわかりやすい。」のような数学的価値を高められるような発言が聞かれるようになり、児童の「やってみよう」のような意識の高まりが見られた。

(4) “もっとやってみよう” が生まれる終末の工夫

終末の工夫では、5年生の授業で子供たちが授業の進行や板書、まとめまでを行い、教師はファシリテーターとして要点の確認や軌道修正など必要な部分を押さえることに徹した。そのことにより児童と共によりよい授業を創り上げていこうという意識をもたせることができた。また、6年生の授業では、疑問点を出し合うことによって生まれた問いが次の学習の問いにつながった経験を通して、算数に主体的に関わりよりよいものを創り上げていく態度を身に付けることにつながっている。

10 研究の課題と今後の展望

(1) “わくわく” が連続する単元デザインの工夫について

児童が「解いてみたい」という思いを持ち、主体的な学習を促すためには、内容を精選とともに提示方法等の工夫を行っていく。

(2) “なぜ” が生まれる導入の工夫について

具体的見通しをもっためあてを児童とともに考えていくことが難しい場面があったため、研修や実践例を共有しながら学校全体で進めていきたい。

(3) “やってみよう” が生まれる展開の工夫

すべての児童が自分なりの考えを持ち、学び合いに向かえるようにと実践を重ねてきたが、個人差が大きく、細やかな手立てを工夫しなければならない。また、伝える意欲には課題が残っており、自信を持たせる取組が必要である。

(4) “もっとやってみよう” が生まれる終末の工夫

算数に主体的に関わる姿に対して、指導と評価の一体化につなげられるように、蓄積された振り返りの活用や振り返りの視点や方法を更に検討していきたい。

(5) 次年度への展望

導入の工夫，展開の工夫に関して一定の成果を上げることができたので，次年度も引き続き研究を進めていきたい。児童（6年生）が校内研修に参加することで児童の声を授業改善に取り入れることができた。次年度はその対象を5年生まで広げることにより多くの子供たちが活躍できる場をつくっていきたい。

1 1 研究成果の普及

公開授業を実施することで広く研究の成果を示し，本校職員の授業力向上につなげていく。そのことが子供の力を高めることにつながるよう研究を進めていきたい。